

CONTENTS

シビル NPO 連携プラットフォーム／since2014

CNCP 通信

VOL.139／2025.11.5

■今月の土木■



広大な玉名横島干拓地の稲田（明治時代に干拓された地域）

▼シリーズ：適疎な地域づくり

・都市・地方・心地よさの「ちょうどいい」バランス～「適疎」の多角的な視点～

：適疎な地域づくり研究会

▼つなぐ活動

・インフラパートナーグループの活動状況：三村昇

▼身近な土木

・加藤清正の夢～有明海に臨む玉名横島干拓地～

：田中努

▼事務局通信

■加藤清正の夢

ここ、玉名市は、熊本県でも有数の穀倉地帯で、平野のほとんどは戦国時代以降の干拓によって造成された土地だそうです。

本格的な干拓は、加藤清正が、豊臣秀吉の命で肥後藩（現在の熊本）に入国し、翌年の天正 17（1589）年に着手したのが始まりで、以来、加藤氏から細川氏へと引き継がれ、江戸、明治、大正と続き、戦後直後の昭和 21（1946）年に国営横島干拓事業となり、昭和 42（1967）年に潮止めを行ったのを最後に、現在に至っているそうです。

上の写真は、今年の 9 月。土木学会全国大会の週末に、この地を訪れたときのものです。（田中努）

▼身近な土木に続く



▼シリーズ：適疎な地域づくり

都市・地方・心地よさの「ちょうどいい」バランス
～「適疎」の多角的な視点～シビル NPO 連携プラットフォーム
適疎な地域づくり研究会

10/3 に行われた CNCP の総会のあとのプロジェクト発表会で、「適疎な地域づくり」の活動報告を聞き、小松理事が、生成 AI に、CNCP のホームページに掲載してある「CNCP 通信（過去 1 年分の掲載とバックナンバー検索）」のページを指定し、「適疎な地域づくり」に関して、ChatGPT-5（OpenAI）には一般向け雑誌記事を、NotebookLM（Studio）にはラジオのトーク番組のような紹介と解説記事を、作って貰いました。ホームページの下記に掲載しましたので、見てみてください。

※URL：<https://npo-cnnp.org/page-7364/page-23822>

本文は、その内、この記事のタイトルで生成されたトーク番組風の音声ファイルを基に、編集したものです。なお、話者は、オリジナルでは無名ですが、Speaker1・2 では味気ないので、私の知る範囲で似た声の、雅治さんと優香さんにしました。（笑）

■雅治：どこかに出かけて、ここは人が多すぎるなとか、逆に、なんか寂しいくらい人がいないなって感じることありますよね。そのちょうど真ん中のなんというか、心地よい間みたいな感覚。今回はですね、まさにそのちょうどよさを探る考え方、「適疎」について、一緒に考えていきたいと思います。

今回の情報源は、シビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）が発行している CNCP 通信の記事なんです。特に代表理事の山本卓朗さんの考え方ですとか、あと他の研究者の方、それから CNCP 自身の取り組みを通じて、「適疎」っていうのがどういう意味を持つのか掘り下げていきます。

目指すのはですね、「適疎」って結局どういうことなのか、それからどんな視点があるのか。そして、これからの地域とか私たちの暮らしを考える上で、あなたにとって何かこう、ヒントになるようなことが見つければいいなと。そういうことです。さあ、この「適疎」という、もしかしたらちょっと聞き慣れないかもしれない言葉の世界、一緒に探求していきましょうか。

まずは提唱者のお一人、山本卓朗さんが、CNCP の記事で示している「適疎」の考え方から見ていきましょう。山本さんはそれぞれの地域特性を生かした魅力を引き出し、多くの人が住んでみたい、行ってみたいと考えるような、過密でもなく、過疎でもない地域だと。まあ、こういうふうに表現されています。これ、シンプルに見えますけど、なかなか、深いですね。

■優香：ええ、そうですね。これ、単に人口が多過ぎず、少な過ぎずっていう、そういう話じゃなくて、地域を元気にするための、まあ草の根的な活動と結びつけて考えているんです。観光客とか、イベント参加者みたいな交流人口とか。あとは住民じゃないけど、地域と継続的に関わる関係人口を増やすみたいな、そういう取り組みですね。記事では古民家を改装したお店とか、ミニホテルとか。あと、街全体をアートで盛り上げるみたいな試みを例に挙げて、その土地ならではの個性を生かすのが大事なんだと強調していますね。地域づくりのスケール感もまあ、いろいろあるんだと。

■雅治：なるほど。数字だけでなく、その場所が持っているポテンシャルとか人の流れとか、そういう質的な部分がポイントなんです。しかも記事によると、この「適疎」っていう考え方自体はなんと 1960 年代にもあったそうですね。全く新しい概念ってわけでもない。それが今、どうしてまた改めて注目されているんでしょうか。

■優香：うん。それはやっぱり日本全体で人口減少が進んでるっていう、その現代的な背景が大きいでしょうね。多くの地域で担い手不足とかコミュニティの維持が難しくなってるじゃないですか。そう

いう中で、ただ人を増やすっていう発想だけじゃなくて、地域の魅力を高めて、こう持続可能なあり方を模索する。その視点として「適疎」がまた光を浴びてるんじゃないかなと思いますね。そしてここが重要な点だと思うんですけど。山本さん、これは過疎地だけの問題じゃないってはっきり指摘しているんですよ。例えば東京みたいな大都市でも、災害に弱い密集地もあれば、一方で昔ながらのなんていうかご近所付き合いが残っていて、コミュニティがちゃんと息づいているような、そういう「適疎」な空間も存在するんだと。

■雅治：ああ、なるほど。

■優香：ええ。つまり都市か地方かみたいな、そういう単純な二択の話じゃないんだと。もっと普遍的な課題なんだっていうわけですね。

■雅治：そして、私が記事読んでいて特になるほどって膝を打ったのはですね、「適疎」な地域づくりを新しいふるさとづくりだって捉えている点なんです。ご自身の戦時中の疎開体験を踏まえて、生まれ故郷だけが故郷じゃないんだと。人々が魅力を感じて何度も訪れたいくなるような「適疎」な地域っていうのが、第二、第三の故郷になり得るんじゃないかっていうんですね。これって、あなた自身の故郷のイメージとも、もしかしたらどこか重なる部分があるかもしれませんよね。例えば都会生まれだとしても、なんかこう心惹かれて何度も帰りたくなる場所ができれば、そこも故郷って呼べるかもしれないみたいな。そういう視点は面白いなと思いました。

さて、この「適疎」という考え方ですけど、他の研究者の方とか専門家の方も注目してきたみたいですね。ちょっと歴史を遡ると、文化人類学者の米山俊直さん。このお名前が上がってくるんですね。

■優香：はい、そうなんです。CNCP 通信の記事でも紹介されていますけど、米山さんは 1969 年に「過疎社会」という本で、おそらく初めて「適疎」という言葉を使った人物とされているんですね。興味深いのは、彼が過疎を単なる社会問題としてだけじゃなくて、もっとこう個人の生き方に関わる、ある種実存的な問題として捉えていたっていう点なんです。その上で、「適疎」を過疎の対極にある、まああるべき理想の状態として提示したということですね。

■雅治：ええ、1969 年ですか？

■優香：ええ、半世紀以上も前の指摘なんですけど、彼があげた過疎対策の四つの視点っていうのがあって。えっと、村の過去にとらわれない個人の選択を尊重する。生活水準は都市との平等を目指す。新しい知を入れる。これ、現代の「適疎」を考える上でも驚くほど示唆に富んでいるんですよ。つまり、伝統的な枠組みとかに固執しないで、個人の自由な選択をベースに都市との格差をなくして、外部からの新しい人を積極的に受け入れるべきだと。当時としてはこれ、かなり先進的な考え方だったんじゃないでしょうかね。

■雅治：へえ、半世紀も前にそんな本質的な議論があったんですね。なんか、伝統を守るっていうより、もっと開かれた個人の意思を尊重した地域社会を、もうその頃から模索していたと。そこから今度は現代に目を向けると、コミュニティデザイナーの山崎亮さんも「コミュニティデザインの時代」という本で「適疎」について言及されている。これはまたちょっと違った角度からのアプローチになりそうですね。

■優香：そうですね。山崎さんの場合は、より現代的なというか、実践的な視点から「適疎」を捉えている感じですね。その記事によれば、都市生活にちょっと疑問を感じた若い世代が地方に移住して、より人間らしい暮らしを見いだすみたいな、そういう文脈で触れているようです。例えば、地元の食材を活用したカフェを開いて地域経済に貢献するとか、あるいは、もともといた住民の方と新しく来た住民が一緒になって何か新しいことを始めるとか。で、山崎さんが重視しているのは、それぞれの地域にとっての適正な人口規模っていうのを見極めて、将来像を描くこと。そして、ここが非常に重要なポイントだと思うんですけど、「適疎」っていうのは客観的なデータとか指標だけで測れるもんじゃなくて、個人の感覚によるところが大きいんだと指摘してるんです。

■雅治：ああ、なるほど。

■優香：つまり、どこから来たかとか、どんな価値観を持ってるかによって、ちょうどいい空間の感じ方って、人それぞれ違うかもしれないってことなんですね。あなたにとっての「適疎」は、他の誰かの「適疎」とはまた違うかもしれないと。

■雅治：ああ、なるほど。それは大きな視点ですね。「適疎」に唯一絶対の正解があるわけじゃないんだと。むしろ、主観的な心地よさみたいなものが、すごく大事な核になるっていうことですね。それはなんかすごくしっくりきます。そうすると、最近の研究ではどういうアプローチが取られてるんでしょう？ 摂南大学地域総合研究所の適疎戦略研究会っていう動きもあるようですが。

■優香：ええ、摂南大学の野長瀬裕二教授を中心とする研究会ですね。これはより政策的というか、実践的な側面が強いアプローチと言えるかもしれません。CNCPの記事によると、関西圏の自治体とネットワークを組んで、経済学、経営学、農学、工学といった、まあ多様な専門分野の知見を集めて「適疎」を目指しているということのようです。彼らが定義する「適疎」っていうのは、人口が減っていく中でも持続可能な地域経済と生活基盤がある状態。つまり、地域にちゃんと仕事があって、生活の質がある程度保たれている、そういう状態かなと言えるでしょうね。うん。研究会では、移住定住の支援策とか、公共交通をどう維持するか、あるいは改善するか、雇用の創出、それからふるさと納税の活用といった、かなり具体的な政策課題が議論されているみたいですね。で、研究を通じて住民の税負担能力、まあ、担税力って言いますけど。それとか、地域の産業振興、あとは都市へのアクセスの良し悪しみみたいな要因が「適疎」を実現する上で重要だってことが見えてきているようです。経済的な持続可能性っていう視点がより強く打ち出されているのが特徴と言えそうですね。

■雅治：なるほど。山本さんの魅力と故郷っていう捉え方から始まって、歴史的である意味理想論的な視点。それから、山崎さんのコミュニティデザインと主観性の大切さ、そして摂南大学の経済生活基盤っていうすごく現実的な側面まで。いや、「適疎」っていう一つの言葉を、本当にいろんな角度から深掘りしているんですね。

■雅治：さて、ここで今回の情報源であるCNCP、その自身の取り組みに話を戻しましょうか。彼らも「適疎な地域づくり研究会」っていうのを立ち上げて、このテーマに積極的に関わってるんですね。

■優香：はい、その通りです。彼らの活動のまあ歩みみたいなものがCNCP通信の記事で紹介されていましたね。それによると、大きく三つの段階を踏んできたみたいです。最初はCSV、つまりCreating Shared Value、日本語だと共有価値創造ですかね。そういう考え方を学んだそうです。これは企業が社会課題の解決を単なる慈善活動としてじゃなくて、自社の事業活動そのものを通じて行うことで、社会的な価値と経済的な価値の両方を生み出そうっていう、そういう考え方ですね。

■雅治：なるほど。ビジネスとして社会貢献を考えるということですね。

■優香：ええ、そういうことです。その上で、次の段階ではより具体的に「適疎な地域づくり」っていうテーマに焦点を当てたと。特に建設業界、まあゼネコンとかがこの課題にどう貢献できるのか、何か新しい事業モデルは作れないかとか、そういうかなり泥臭い議論って書かれていましたけど、そういうのを重ねて「適疎な地域づくりへの提言」(案)という形に一旦まとめたそうで。

■雅治：へえ。提言まで。

■優香：ええ。そして現在はその提言をさらに発展させる段階に入っていると。全国の、まあいろんな地

域で行われている地域づくりの先進的な事例を集めて。土木と建設の専門家、いわば土木屋さんとしての知識や技術をこれからの地域づくりに具体的にどう生かしていけるのか、その方法を探求しているっていう、そういう状況のようです。CNCP のウェブサイトには、この研究会の成果として「適疎」に関する特設ページがあって、集めた事例とか提言なんかが公開されているそうなので、もしより深く知りたい場合は参考になるかもしれませんね。

■雅治：理論から実践へ。そして具体的な事例の共有へと。CNCP 自身も「適疎」の考え方を深めながら社会実装を目指している。そういうことなんですね。これは、何か具体的なヒントを探しているあなたにとっても良い情報源になりそうですね。

■雅治：さて、ここまでいろいろな視点から「適疎」を見てきました。ちょっとまとめてみると、「適疎」っていうのは単に人口密度の話ではなくて、過密と過疎の間の、なんかこうちょうどいいバランスを見つけて。その土地ならではの個性とか魅力を最大限に生かしていくこと。まあ、そんな風に言えそうですね。

■優香：そうですね。そしてそれは人口が減って、社会のあり方が大きく変わっていくという時代において、持続可能な未来を描くための非常に重要なキーワードになってきているのかもしれないですね。面白いのは、山本さんのふるさと論、米山さんの歴史的な視点、山崎さんの主観性の重視、摂南大学の経済基盤重視と。視点は本当に多様なんですけど、でも共通してなんていうか、都市か地方かとか、過密化過疎化みたいな、そういう単純な二元論を超えようとしているっていう点ですよ。

■雅治：本当にそうですね。そして忘れちゃいけないのが、山崎さんも指摘していましたが、「適疎」は一人一人感じ方が違う。主観的なものでもあるんだっていう点。データとか計画ももちろん大事なんですけど、最終的にはそこに住む人とか、訪れる人がどう感じるか・・っていう。その体感みたいなものが重要になってくると。

■優香：まさに客観的な条件整備と主観的な心地よさ。その両方がやっぱり必要なんでしょうね。

■雅治：それではここで、あなたに問いかけてみたいと思います。あなた自身のコミュニティ、あるいはこれから住んでみたいとか、訪れてみたいなって思う場所について考えてみてください。つまり「適疎」とは、あなたにとって具体的にどんな状態を指すでしょうか。何があなたにとってのちょうどよさを作り出すんでしょうかね。

今回は CNCP 通信の記事を手がかりに、「適疎」という考え方をめぐる様々な視点を探求してきました。いや、本当に奥が深いテーマですね。

■優香：ええ。最後にもう一つだけ、ちょっと思考を広げる問いかけをさせてください。私たちは主に人口の密度っていう観点から話をしていききましたが、もしかしたら他の密度っていうのも、ある場所をちょうど良いと感じる上で重要かもしれないと思うんです。

例えば機会の密度。仕事とか学びとか、何か新しい挑戦をするチャンスがどれくらいあるか。あるいは人間関係の密度、人とのつながりがどれくらい濃密なのか、それともどれくらいプライバシーが保たれるのか。それから自然の密度、身近にどれだけ豊かな自然を感じられるか。こういう、なんか様々な種類の密度が複雑に組み合わさっている場所を、あなたにとってちょうど良い、つまり「適疎」だと感じさせているんじゃないでしょうか。少し立ち止まって考えてみる価値があるかもしれませんね。

■雅治：本日はお聞きいただき、本当にありがとうございました。

▼土木に関わる人と活動／つなぐ活動

インフラパートナーグループの活動状況

土木学会/インフラパートナーグループ 委員長
土木と市民社会をつなぐフォーラム 委員長
(株式会社エイト日本技術開発/防災保全事業部/東京支社/防災計画分野)

三村 昇



土木学会土木広報センターのインフラパートナーグループ(※)は、昨年度から新たに活動をスタートし、インフラパートナー制度(※)の拡充やインフラパートナー(※)の活動支援を目的に取り組みを進めています。これら活動は、「土木と市民社会をつなぐフォーラム」(※)と協働して取り組んでいます。

(※「インフラパートナー」とは、土木学会が市民団体との連携を目的に立ち上げた「インフラパートナー制度」に沿って合意書を結んだ団体；詳細は「CNCP 通信 2024 年 4 月号 (VOL.120)」参照)

https://npo-cnnp.org/wp/wp-content/uploads/2024/04/CNCPtsushinVol.120_all_p25_20240405.pdf

以下に、今年度の活動状況などを報告させていただきます。

■活動方針

昨年度実施したインフラパートナーへのアンケート調査結果(※2)と、昨年度末から今年度始めに掛けて実施した、インフラパートナーとの意見交換の結果を踏まえ、今後の活動方針を以下としています。

- 1.インフラパートナーが開催するイベントへの参加及び後援・広報
- 2.インフラパートナーの活動を学会広報メディアにより対外的に発信
- 3.本部委員会、支部及び他団体との交流・情報交換の場の提供

今年度は、この中で、下記のインフラパートナーの意見を踏まえ、特に1.と2.を中心に取り組むこととし、毎月1回、運営会議を開催して検討・議論を進めています。

(※2「CNCP 通信 2024 年 10 月号 (VOL.126)」参照)

https://npo-cnnp.org/wp/wp-content/uploads/2024/10/CNCPtsushin_Vol.126_all_p15_20241005.pdf

■インフラパートナー(IP)との意見交換結果

インフラパートナーへのアンケート結果を踏まえ、より具体的な考え方や認識を把握・共有するため、昨年度末から本年度(2025年1月～5月)にかけて、ご協力の連絡を頂いた7団体との意見交換会を実施しました。主な意見は以下の通りです。インフラパートナーの活動の発信や情報の共有を始めとした、土木学会に期待する要望や、その他具体で有益なご意見を多数いただきました。ありがとうございます。

1. インフラパートナーが開催するイベントへの参加及び後援・広報	
IP の意見	・連携するためには、他の IP の活動を知ることは必要(四国) ・IP のロゴは、一般市民にも「土木学会」であることが分かるように(噂) ・土木学会の後援は地域の普通の人にとって敷居が高くなる場合もある(シー) ・CNCP 通信の活動紹介などにより、情報量が増えた点は評価(三島) ・毎月届く CNCP 通信は各地でどんなことを行っているのか参考になる(道守) ・学会等のサイトに掲載する資料を作成できる人がいないので、インフラパートナーグループでやってくれるのであればお願いしたい(道守)
IP の取組提案	○「土木学会後援」が難しければ、「土木広報センター後援」を容易に(噂) ○土木学会の IP サイトや「土木と市民社会をつなぐフォーラム」の facebook など IP のイベントを広報する(多数) ○IP の講演会やセミナーに対する CPD の認定を容易に(シー)

2. インフラパートナーの活動を学会広報メディアにより対外的に発信	
IP の意見	・現在の IP のサイトを見る人はほとんどいない（国境） ・学会の表彰はモチベーションになる（シー） ・学生が、実社会の仕事に参加して収入を得て、単位を取り成長する仕組みが重要。工学の知識だけでなく、人間力・交渉力・コミュニケーション力の向上が重要（三島） ・IP が持っている価値を土木学会が広めてくれるとメリットがある（三島）
IP の取組提案	○全国大会のポスターセッションによる IP の PR（噂） ○土木学会の表彰（インフラパートナー賞など）の創設（噂） ○インターンシップや企業・行政の若手研修用に、実施している体験学習等のカリキュラム・ガイドブックを、IP や学会と共有・提供可（三島） ○IP 団体が作成している講義動画等を、インフラパートナーグループで情報収集・ネット掲載・PR のスキームを作成（三島）
3. 本部委員会、支部及び他団体との交流・情報交換の場の提供など	
IP の意見	・他分野・異業種と繋がることで活動が広がる。他地域の同様な活動をする団体とも連携したい（四国） ・連携には意見交換や情報交流が必要。交流会は事前に困りごと・知りたいことリストを準備して実施（四国） ・CNCP 通信・学会 HP 等での紹介や年 1 回の交流会は有効（四国） ・同様の活動をしている団体があれば、意見交換・セミナーの共同開催や現地活動の協働が可能（国境） ・災害時の現地支援などで IP であれば直ぐに現地と連携できると良い（国境） ・IP 仲間と運営上の事務的な相談などもできるとよい（国境） ・土木学会というアカデミズムと市民を何かの柱・テーマで繋ぐ仕組みが構築出来るとメリットが生まれる。連携する目的をより具体的に（シー） ・18 団体の多くは既にネットワークを持っているので、18 団体を核にしながらエリア単位で広げる（シー） ・地域毎の IP が集まる機会・場が必要。ただし旅費の手当は重要（シー） ・地域の仲間を増やす取り組みは、先ずどこかの支部で試行するのがよい（噂） ・支部を中心に展開して IP 外の方々と横串ができると、メリットがある（噂） ・現 18 団体にとってのメリットは少ないので、現メンバーが地域の繋がりを作っていくことによる新たな展開を期待（噂） ・18 団体は、地域における指導的立場で動く枠組みがよい。地域の小団体との IP 合意書は支部の事務局長と結ぶぐらいが適切（噂）
IP の取組提案	○学会支部のイベント参画や委員会の設置により、様々な委員と繋がる枠組みがあるとよい（噂） ○支部の地区行事（市民向け講座等）やシビルネット等を活用、あるいは委員会・部会等を創設して広報（四国） ○既存の地域ネットワークやテーマネットワーク等の仲間と連携（シー） ○単独の小規模や活動の初期段階の団体等の仲間化・連携（噂） ○現 IP 団体やその仲間と、オンラインでのパネルディスカッションや座談会とそれら動画の広報（噂）

（シー）：シーニックバイウェイ支援センター（北海道）

（国境）：国境なき技師団（東京）

（三島）：グラウンドワーク三島（静岡）

（四国）：四国防災八十八話・普及啓発研究会（香川）

（里海）：かがわ里海大学（香川）

（噂）：噂の土木応援チームデミーとマツ（福岡・長崎）

（道守）：道守養成ユニットの会（長崎）

これらの意見を踏まえた今年度の取り組み状況を概略以下に示します。

■インフラパートナーのイベント等活動の広報支援

インフラパートナーから多くのご意見を頂きました、活動等の広報に関する支援について、以下の方法で進めています。どちらも決して閲覧が多いサイトとは言えませんが、少しでもインフラパートナーの活動が目に触れる機会を増やしていければと考えています。

- ・土木学会のインフラパートナーサイト（右上図）でのイベント開催・結果報告等の活動紹介
<https://infrapartner.jsce.or.jp/>
- ・「土木と市民社会をつなぐフォーラム」の facebook（右下図）でのイベント等活動紹介
<https://www.facebook.com/jsce.civil.npo/>



■CPD 認定プログラムの申請支援

インフラパートナーが講演会やセミナー等を開催する際に、土木学会のCPD 認定プログラムの申請を支援して欲しいとの意見があり、申請フォームの記入サンプル等参考情報を必要に応じて提供できるよう準備をしています。

■土木学会全国大会のポスターセッションによる PR

土木学会全国大会のポスターセッション（9月11日）で、インフラパートナー制度・インフラパートナーの紹介を実施しました。（「CNCP 通信 2025 年 10 月号（VOL.138）」参照）

https://npo-cnnp.org/wp/wp-content/uploads/2025/09/CNCP%E9%80%9A%E4%BF%A1Vol.138_all_p9%E5%BC%8820251005%E5%BC%89.pdf

■土木学会の表彰（インフラパートナー賞）の創設

表彰は、インセンティブあるいは活動のモチベーション向上になるとの意見を踏まえ、新たに、「土木学会インフラパートナー賞」を設け、毎年選考し、表彰することを検討しています。

インフラパートナー団体からの推薦に基づく以下の賞を想定しています。

- ・「インフラパートナー〇〇（団体名）賞」：推薦したインフラパートナー団体名の賞
- ・「土木学会支部長賞」：支部の中の最高位の団体
- ・「土木学会土木広報センター長賞」：全体の最高位の団体

表彰結果は、地域の業界誌や土木学会誌等に、受賞者・推薦団体名と内容を投稿・掲載する予定です。

■インフラパートナーが作成している動画紹介

インフラパートナーが保有あるいは得意としているスキルや活動等について、土木学会の広報ツールを活用し、対外的に発信する準備をしています。土木広報センター事務局が管理・運営する、「土木学会 tv」の「再生リスト」を活用し、インフラパートナーが YouTube チャンネルに登録している動画から、該当する講義・研修やイベント等の動画を紹介していく予定です。

<https://www.youtube.com/@JSCETv/playlists>



今後もみなさんのご意見を踏まえた取り組みを進めていく予定ですので、よろしくお願い致します。

■干拓の跡

前ページの図1右の水色部分の大半が、清正の時代の干拓地で、当時は、北東の海岸から南西に向けて新田を作っていました。この時代の干拓地は、現在の干拓地の半分近くを占めているのですから、清正とそのブレーンの先見性と技術力・マネジメント力は凄いと思います。残念ながら、私の事前勉強が足らず、清正の「東塘・西塘（とも＝堤）」の跡は確認することが出来ませんでした。

下の写真1は、江戸時代（安政6年）に完成した「九番堤防」です。上図1右の緑色と黄色の境になります。ここには「横島校区まちづくり委員会」の説明板が設置され、「当時はすべて人力で、1日中この堤防に上ったり下ったり『潟（がた）』を担ぎ上げ、・・・その担ぎ手は若い娘たちと主婦であった」と記され、「潟担い節」という口伝の民謡が紹介されています。



写真1：安政6（1859）年に築造された「九番堤防」（背景の山が「横島山」）

上の写真1の堤防の手前は、明治時代の干拓で生まれた新田で、右の写真2のように地盤面は海拔1mだそうです。本号の表紙の写真のような広大な稲田が広がっていて、これらの干拓により、玉名横島地区の収穫量は飛躍的に増大したでしょう。

下の写真3は、明治時代に建設された潮受け堤防で、図1右の黄色とピンクの境になります。明治以降の堤防はコンクリートを用いた頑強なものになったと言われますが、写真の構造では一番上のパラペットのみがコンクリート製で、下の本体部は土盛土に石積みの被覆をしたようです。地盤高は、この堤防の内外で同じレベルになっています。

この明治堤防は、更に海の中に作ったので、台風や高潮で何回も決壊し、多くの死者と損害を出しましたが、昭和42年の横島干拓潮止めによって、堤防決壊の心配が無くなったそうです。



写真2

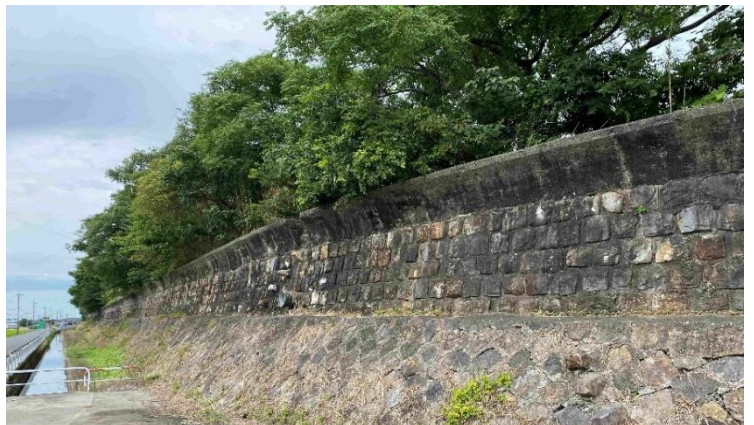


写真3：明治時代に建設された潮受け堤防（左右は別の場所。右は明治26年に築造された。）

CNCP は、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です。

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

●登録事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目11番15号
ソレイユ入谷

事務局長 田中 努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<https://npo-cnnp.org/>



▼事務局通信

■10月の実績

●令和7年度定例総会

開催日・場所：10月3日（金）日本交通協会
議題：令和6年度の事業報告・決算報告／令和7年度の事業計画／プラットフォーム事業支援プロジェクトの発表会

●第138回経営会議

開催日・場所：10月21日（火）Zoom 会議
議題：サロンの計画／適疎な地域づくり研究の進め方

■11月の予定

●第139回経営会議

開催日・場所：11月11日（火）Zoom 会議
議題：各事業の進捗確認／サロンの準備／適疎な地域づくり研究の進め方

●第2回「CNCP サロン」

開催日・場所：11月27日（木）(株)アイ・エス・エス
議題：「学生と社会」ー学生と土木業界やインフラ関連団体をつなぐー

■現在の会員と仲間の数

●会員：賛助会員 30／法人正会員 8／個人正会員 22／合計 60

●仲間：サポーター95／フレンズ 141／土木と市民社会をつなぐフォーラム 15／インフラパートナー18／合計 269

●CNCP の活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただいています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイアート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／佐藤工業／シンワ技研コンサルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹中土木／鉄建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛島建設／土木学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサルタンツ／フジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田建設工業（以上 30 社）



土木と市民社会を
つなぐフォーラム



インフラパートナー
JSCE 土木学会